
無限の世界で旅をする

ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限の世界で旅をする

【著者名】

ノーラ

【あらすじ】

ここは、有るかもしれない世界が街として存在している世界。そんな世界にたつた今生まれたばかりの少女が、世界を巡る旅をするお話。

唐突に、意識が覚醒した。

いや、意識が生まれたというのが、正しいかもしない。何故なら別に寝ていたわけでも、気を失っていたわけでもないからである。そのような記憶も無いし、そもそも自身の記憶というものが全く無い。しかし、そのことを不思議に思うことは無かつた。たった今自分が生まれた事を、何故か理解していたからである。そして自分は生まれた瞬間から多少の知識を持つている。何故理解し、知識を持つているのかは謎である。

「……？」

薄暗くてよく見えないが、からうじて見えるのは目の前の大好きな女性の石像。どうやら自分が生まれたのは、この石像が抱えている器の中のようだ。

つまりこの石像が母親ということだろうか？

そんなことを考えていたら不意に、誰かの声が響いた。

「へえ、今回はずいぶんと可愛いらしい子が生まれたね。白い髪に青い瞳、とても綺麗な色だ」

「え？」

誰も居ないと思っていた部屋から、自分以外の声がすることに驚いて声のした方を向いてみると、そこには無精髭を生やした黒髪の男が胡散臭い笑みを浮かべてそこに立っていた。

いつからそこに居たのだろうか？ 全く気配がしなかつたのは、この男が気配を消しているからだろう。

「自分がたった今生まれたことは理解しているね？」

「……うん」

「よし、それじゃあまあは血口紹介とこにうか。と言いたいところだけど、僕は君をひつひつひつとこつ輩じゃないからあまり警戒しないで欲しいかな」

そう言われて初めて気づいたが、どうやら自分は無意識の内に反撃ができるように手を握り締めていたようだ。

まだ、若干の警戒心を持ちながら体の力を抜いた。

「好戦的なのは嫌いじゃないけどね。まあこんな見るからに怪しい僕が、いきなり田の前に現れたんじゃあしちゃがないかな」

全くそのとおりだと思った。生まれたばかりの自分に気配を消しながら近づいてきたのだ、問答無用で殴りからなかつただけでも感謝してほしいものである。

というかこの男、自分が怪しいと自覚していてこんな真似をするなんて何を考えているのだろうか。

「僕の名前は泉だ。呼びかたは泉かお兄さんとでも呼んでくれ

「おじさんは、ここで何をしているの？」

「……まあいいんだけどね。僕は君のよひにのの場所で生まれた子達の世話をしているんだ」

自分がおじさんと呼んだことには特に何も言わず、泉は苦笑いを浮かべながらそう言つた。あつさりとおじさん呼ばわりされたことを許したと言つことは、もしかして言われ慣れているのだろうか？

「私みたいに」で生まれた子が他にも居るの？」

「そのとおりだよ。みんなもうこの世界を旅しに行つてしまつたけ

「そうなんだ
どね

自分以外にこの場所で生まれた子とこいつもに、多少興味が惹かれたが近く居ないのならしょうがない。生きていればその内会つことがあるだろ？

「それで君の名前は何というのかな？」

「私の名前……？」

「そう、名前だ」

普通は、生まれたばかりで名前などわかるはずも無いのだが。何故か自分の名前が頭の中に浮かんできた。どうしてそれが自分の名前だと思ったのかはわからないが、自然にその名前を口にしていた。

「私の名前は霊」

「霊ちやんか、それじゃ あ自己紹介も済んだことだしそうやる行こ

うか」

「どこへ？」

「君がこれから住む場所だよ」

田の前の男はやはりどこか胡散臭い笑みを浮かべてそう言った。

「といつても、行くのは僕の家なんだじね

「おじさんの家？」

「やうだよ。ああそりこえれば、僕としたことがつつかつて忘れていた

「……？」

「おめでとう、そしてヨウジヤマの世界へ。僕は君を祝福するよ」

「さて、まずはこの世界について話そつか」

あの後、泉に連れられ泉の家までやつてきた。自分の生まれた建物は、森の中にある小さな神殿のような場所だつた。外觀は崩れないのが不思議なほどボロボロで、よく今まで形を保つていられたものだ。

泉の家はそんな神殿のすぐ裏にポツンと建つていた。こんな人気の無い森の中に、大きなログハウスが見えた時は驚いた。しかもこのログハウス、泉が一人で建てたというのだからさらに驚きだ。

「この世界にはね、色々な街があるんだ。しかもその数が膨大でね、なんでも街の数は今も増え続けているそうだよ。聞いた話によると気づいたらそこに有つて、誰も街が増えた瞬間を見た人は居ないらしいね」

どうやら自分の生まれた世界は、中々に面白そうな世界のようだ。

「そうそう、面白いことに街と一緒に土地も増える時があるらしいよ。おかげでこの世界の正確な地図を描くことは不可能とまで言われているんだ」

「なんだか面白そうな世界なんだね」

「実際に面白い世界だよ、それで零ちゃん。こんな世界に生まれた君は今後どうしたい？」

「面白そうだから世界の色々な街を見てみたい」

「即答か、良いねスペツと決めてくれて僕もありがたいよ」

楽しそうなことなら当然興味も沸く。自分の知らない事を知つた

時楽しいと感じたので、世界を旅して周るなんてとても楽しそうだ。

「でも一つ問題があるんだ。」の世界には魔物が生息していてね、下手をすると一つ目の街に着く前に魔物の腹の中、なんてこともあります。りえる話しなんだよ。なんの対抗手段も持たないで世界を旅するなんて自殺行為だ」

「大丈夫、邪魔をされたら殴り倒すから」

「君ならやりかねないね……。それでも一応君のことを鍛えてあげようと思つていたんだけどどうかな?」

「泉が?」

「そうだ、君さえ良ければ僕が師匠になつてあげるよ」

確かに自分は生まれたばかりなので戦闘の知識も経験も無い、別に断ることはないだろ?。

むしろ願つたり叶つたりだ。魔物に食べられるなんて絶対に御免なので、多少は鍛えておいたほうがよさそうだ。

「うん、よろしくお願ひします師匠」

「よしわかった。といっても君は既にそこそこ強そつだから、僕が教えるのは基礎部分だけでも大丈夫だと思つけどね」

「そうなの? 自分ではよくわからないうけど……」

「僕は見ただけで、ある程度どのぐらい強いのかわかるからね。君は相当強くなれると思うよ」

割と凄いことを言つていい気がするが本当だろ?か……?。

しかし、泉ならばありえるかもしれないと思つたのでそこは流しておいた。

「それじゃあ夕食にしようか、準備をしてくるから適当にべつりでいて良いよ」

「うん、ありがと『師匠』」

さて何をしていいよ。周りを見回してみると、部屋の隅に本棚を見つけた。

その中の興味が惹かれた本を1冊手に取つてみる。夕食が出来るまではこの本を読んで時間を潰していくよ。

「準備が出来たよ雫ちゃん。おや、本を読んでいたのかい」

師匠に呼びかけられ気付いたが、自分は結構長い間熱中して読んでいたようだ。

さくさくと読み進められたので、結構なページ数を読んでいた。あまりに集中して読んでいたので、時間があつとこつ間に過ぎていった。

「この面白い師匠」

「気に入ったかい？ その本はこの世界に実際に存在する街をモデルに書かれているらしいよ」

「なんだ。じゃあ旅をしていればこの本の街に行ける？」

本の中の街が実際にあるといつも夢のよつた話を聞いて、期待を込めて聞いてみる。

「運が良ければね。なにせこの世界は広いってものじゃないから知つている街に行くのにも一苦労だ。知らない街に行こうなんて考え

ると、相当運が良くなれば無理じゃないかな

「なんだ……。師匠はこの本の街に行つたことがあるの?」

「残念ながら僕も行つたことは無いね」

行くのが難しいと聞いて落胆したが、絶対に行けないわけではな
いらしいので旅をしていればそのうち辿り着けるだろひ。これは旅
の楽しみが一つ増えた。

師匠の持つてきた料理を覗いてみると、そこには先ほどまで自分
の読んでいた本に出てきた料理と似ている物があつた。

「これつてさつきの本に出てきたやつ?」

「よくわかつたね、作り方が本に書いてあつたから作つてみたらこ
れがまた美味しくてね、それ以降料理をするのが趣味になつたぐら
いだよ」

料理が趣味と聞いて驚いた、この見た目で趣味は料理ですなんて
言われたら思わず笑つてしまいそうだ。というか、実際に笑つてしまつた。

こんなどうみても料理をすることは思えない男が、「趣味は料理で
す」なんて言つたら笑つてしまつのもしょうがないだろひ。

「それつて、私にも作れる?」

「そうだね、旅をするのに料理のスキルも必要だらうから教えてあ
げるよ」

「楽しみにしてる」

笑つてしまつたのを氣にもせずに師匠は約束をしてくれた。似合
わない事を言つているのは自覺しているのだろう。

「よし、料理が冷めないうちに食べようか。料理は出来たてが一番

だからね

「うん」

「明日から修行を始めるから、いっぱい食べておいたほうがいいよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7080z/>

無限の世界で旅をする

2011年12月27日00時51分発行